

阿蘭陀通詞馬場佐十郎の天文台勤務とその業績

片桐, 一男 / KATAGIRI, Kazuo

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

21

(開始ページ / Start Page)

73

(終了ページ / End Page)

88

(発行年 / Year)

1969-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010833>

阿蘭陀通詞馬場佐十郎の

天文台勤務とその業績

片 桐 一 男

はじめに

- 一 修学・経歴
 - 二 天文台勤務
 - 三 異国船応接
 - 四 語学に関する業績 一 文法書
 - 五 語学に関する業績 二 会話書・単語集
 - 六 世界地理・歴史に関する業績
 - 七 自然科学に関する業績
- 結 言

はじめに

寛永十二年（一六三五）、江戸幕府は支那商船に対して互市は以後長崎に限る旨を令し、同十六年（一六三九）の夏には第五回にして最後の鎖国令を発して、ポルトガル人のガレウタ船の来航を禁止するに到って国を鎖閉することとなった。さらに同十八年

阿蘭陀通詞馬場佐十郎の天文台勤務とその業績（片桐）

（一六四一）、先にポルトガル商人のために造った長崎の出島に、欧人にして唯一の商人として残ったオランダ人を平戸から移転せしめることによって鎖国体制を完成した。以後安政元年（一八五四）の開港に到るまで二一四年の長年月、極限された地・長崎において蘭・支二国の商船を限って、通商が許されることとなったのである。

永い鎖国時代を通じてオランダ人はヨーロッパ人としての対日貿易を独占した。一方、江戸幕府ならびにわが識者はオランダ人を通じてヨーロッパ世界の情勢を探知し、西欧文化・技術を輸入したのであった。この期間、日蘭両国人の間に立って、通訳官兼商務官として実地の衝に携ったのが阿蘭陀通詞である。

阿蘭陀通詞は平戸時代・長崎時代を通じて存在し、その数は方を越すとも考えられる。彼ら通詞の中からは語学の才に恵まれ、進んで西欧学術の修得に手を染め、史上その名を逸することのできない成果をあげた者も少なくない。本稿で述べる馬場佐十郎は

幕末期の有能な阿蘭陀通詞であつたにもかかわらず、関係史料の不足からか、兎角研究の進まない人物であつた。幸い、学界の馬場佐十郎に対する関心も近時高まり、調査研究の成果も上がってきている。筆者も年来彼の生涯とその業績に関心をもつて史料の採訪を続けてきたので、管見ながら学界における未紹介史料も加えて、彼の活躍分野を考察し、その業績を整理して評価を加えてみたいと思う。

一 修学・経歴

馬場佐十郎は天明七年（一七八七）長崎に生まれた。これは墓碑銘の歿年から逆算した年である。父は三栖谷敬平といい、母は下川氏。諱を貞由、字は職夫、穀里と号し、佐十郎はその通称である。本姓は三栖谷氏であつた。欧文では Ba. sazuro と署名⁽¹⁾のちオランダ商館長ヘンドリック・ドウフ Hendrik Doeff から Abraham なるオランダ雅名を貰つて署名に使用してゐる。三栖谷氏は長崎の金持で、阿蘭陀通詞馬場家の株を買つて馬場氏を称した人といわれている。伯兄の馬場貞歴（為八郎）は子が無かつたので佐十郎を養つて嗣とした。幼少の事蹟は一切不明である。

彼の語学の修得は伯兄馬場為八郎の影響下に加えて、享和三年（一八〇三）から文化二年（一八〇五）にかけて阿蘭陀通詞の出身でオランダ文法書の著作などに業績をあげた志筑忠雄（中野柳圃）に師事してオランダ語を学び、さらには来日中のオランダ商館長ヘンドリック・ドウフやヤン・コック・ブロムホフ Jan

Cock Blomhoff にフランス語、英語の指導を受けたことによつて進歩が著しかったようである。また、幕府に出仕後、松前に来航した露船との応接に出張した際には、ゴロニンからロシア語をも学んだ。

板沢武雄博士は馬場佐十郎が伯兄為八郎の文化二年における長崎での露国遣日使節レザノフ Rezanov との談判に際して通訳ならびに幕府の答書の蘭訳の功により翌三年小通詞格に進んだ。とされているが、これは板沢博士の依拠された呉秀三博士の「為八郎が小通詞格に進んだ」と記された箇所の読み違いである。⁽²⁾

ドウフの商館日誌の一八〇八年四月三〇日の条に「小通詞為八郎の息子で稽古通詞の佐十郎が今朝江戸へ向け出発した」と明記しているから、少なくとも文化五年（一八〇八）の春までには稽古通詞として勤務するところがあったことは事実である。かつこの年の三月、わずか二十二歳の若さで抜擢されて江戸に召されることとなり、その出発が前記ドウフの日記により太陽暦の四月三〇日に當つていたわけなのである。なお、のち幕府に抱えられてからの文化七年（一八一〇）の記録にも、「稽古通詞馬場佐十郎⁽⁴⁾」とあるから、長崎の阿蘭陀通詞の職階制のうえで稽古通詞に留まつたわけである。

馬場佐十郎の抜擢は、当時浅草蔵前片町西裏にあつた天文台で高橋作左衛門景保を中心に世界地図の翻訳刊行が企図されており、前年十二月に開設された地誌御用の局における本事業に彼の語学の才が採用されることとなつたにはかならない。文化六年になる高橋景保の「万国全図」「日本辺海略図」の作成にあずか

て力を傾注したところである。

佐十郎は所期の用が終つても、ひきつづき江戸在住を命ぜられ、その他の翻訳の命をうけて長崎に帰ることを得ず、ついに文化八年五月天文方に蕃書和解御用という翻訳局が設置されるによび、蘭学者大槻玄沢と相並んでその責任者ともいふべき地位についた。そして平日事なきときは、江戸幕府最大の翻譯事業ともなった『厚生新編』の訳業に当るべきことを命ぜられたのであるが、その内実は、長崎から佐十郎を呼び戻そうという要望が大きく、幕府がこれを拒否して江戸に引留めておくための名目でもあったのである。

かくて、同八年六月にはゴローニン監禁事件に際して、幕命を帯して松前に赴き、その取り調べに当り、ロシア語をも学ぶ。その十二月には粟米歳銀佩刀を許され、幕府の士とみなされるに到る。さらに文化十年五月露船の松前に来り、九月にゴローニンも帰ったのであるが、この時も佐十郎は文化六年以来天文台入りした足立左内と松前に出張していたのであって、ドゥーフは陽暦の一八二三年三月三日の条で「小通詞為八郎の息子で江戸滞在中の通詞佐十郎が日本の十月二日に松前へ出立した」と述べてその行動を明記している。同年江戸に立ち戻り十二月に到つて馬場・足立両名は魯西亜辞書取調御用掛を命ぜられ、翌十一年四月には幕臣に取り立てられ小普請組入することとなった。越えて文政元年（一八一八）五月十三日、イギリス船ブラザース号の浦賀に来航するや足立左内とともに現地に出張し、さらに同様五年（一八二二）四月二十九日再びイギリス船サラセン号が浦賀に来航する

とまたまた足立とともに五月四日同所に出張、その応接の任に当り、帰つて褒賞を受けたが、借しくも三十六歳の春秋に富む身をもつて七月二十七日暦局邸内の仮宅において病没した。仏諡を持ち院純信日敬居士といい、現今、杉並区の宗延寺にその墓碑があり、文政六年正月高橋景保三十九歳の撰文にかかる墓碑銘を存している。

二 天文台勤務

稽古通詞馬場佐十郎の天文台入りは前述の通り、文化五年三月であつた。以後文政五年の夏に、その短かい生涯を閉じるまでの十五年間は江戸を中心に彼の生活と活躍が展開する。

これより先、明和八年（一七七二）の夏、ベニョウスキー Moritz August Aladar Graf von Benyovsky が露国船に塔乗して薩摩の大島に漂着、長崎のオランダ商館にあてて、ドイツ文の書面をもつて露国の南下の野心あるを我が官憲に報じ、在留オランダ商館長アルメナウルト Daniel Arnenaut および新任商館長フェイト Arend willem Feith は連名でこれを長崎奉行新見加賀守・夏目和泉守に報告した。しかしその後、事なく済んだため、さしたる問題も生じないですんだが、安永七年・八年と続いて蝦夷地に露船が出現して通商を請ひ、寛政四年（一七九二）露国使節ラクスマン Adam Krylovich Laxman が伊勢の漂流民大黒屋光太夫等を護送して根室に来航、通商を求めて拒絶にあつたが、この頃になると、ようやく蘭学知識も普及して識者の経世論しきりに世に問われることとなつて、幕府も蝦夷地の巡視なら

びに直轄化を行なつてその具体的対策をたてねばならなくなつた。かつ、これが必要の直接・決定的動機は文化元年（一八〇四）九月六日、かつて与えた信牌を携帯して露国使節レザノフ Nikolai Petrovich Rezanov が長崎港に現れたことによる。レザノフは翌年幕府の強硬にしてすげない返答に接し退去した。このため露船は翌文化三年九月に樺太に來たつて松前藩会所を襲い、さらに翌四年四月には択捉島に、同五月には利尻島に侵寇のうへ幕府の船を焼くなどの暴挙に出るにおよんで、問題頻発・重大化し、幕府の対処は急を要することとなつた。

かくて文化四年七月、レザノフ応接時の小通詞格馬場為八郎に加えて大通詞名村多吉郎の兩名を江戸に召喚のうへ露西亜事情の調査を命ぜられ、翌五月三月には蝦夷地出向を命ぜられ、松前に到り、露人來寇の事後処理をすませて六年二月に御用済となつて江戸を發し長崎に帰った。

馬場佐十郎の天文台入りはまさに伯兄為八郎の蝦夷地出向中に當つてゐる。佐十郎の採用は前記の通り天文方高橋景保のもとで世界地図の翻譯刊行の事業助成に當るためであつたが、と同時にこの期の幕府における外交事務、特に現地に出向して接衝・応接の実務に當る技量が必要重大視されていたに外ならない。というのは、佐十郎は単に語学の才に恵まれていたというだけでなく、後述もするごとく応接時の会話にすぐれていたために外ならず、ここに弱冠二十二歳の青年稽古通詞馬場佐十郎が公儀に召し抱えられる理由が存したのである。彼の語学・会話の才の進歩はオランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフの直接指導があつたかつて大

な効果を生んだものと思われるのであつて、ドゥーフが述べる言葉、

一八一〇年予の二度目の参府の際、予は江戸にて一人の和蘭通詞に出会せり。此者は長崎にて予の門人なりしが、一八〇八年に將軍の命にて江戸に召出されしものなり。此の頗る俊秀なる青年は、本名馬場佐十郎と称す云々⁽⁸⁾

によつても容易に首肯されるところである。

佐十郎が江戸に出立して間もなく、その文化五年の秋八月十五日（一〇月四日）長崎に突然來航した英艦フエートン号 H.M.S. Phaeton が一大欺瞞・狼籍事件を惹起した。以後オランダ船・異国船に対する臨検方法が嚴重化して応接時の阿蘭陀通詞、また多忙を極めることとなつた。

すなわち唯一の外交場長崎においては、幕府の意を帶して長崎奉行曲淵甲斐守景露はオランダ商館長ドゥーフの協力も得て、鋭意オランダ船・異国船に対する臨検方法の改革に當り、これは少なくともとも翌年夏六月には成案を得てその実行を各部署に司令するまでに到つた。

これと同時に、先年のレザノフの來航ならびに前年のイギリス軍艦フエートン号の來航事件に刺戟されて、この種の事件・応接に対処する必要から、文化六年二月二十六日幕府はオランダ商館の協力を得て、長崎の阿蘭陀通詞をしてヘトルについて露語・英語の兼修を命じた。長崎奉行は通詞仲間と協議のうへ有効・有能なる次の六名の人選を得てこれに命じた。すなわち阿蘭陀通詞

本木莊左衛門 末永甚左衛門 馬場為八郎 岩瀬弥十郎

吉雄六次郎 馬場佐十郎⁽¹⁰⁾

の六名である。これらの通詞の顔振れをみると、本木莊左衛門、が大通詞見習であるのを筆頭に、末永甚左衛門は小通詞、馬場為八郎は小通詞格、岩瀬弥十郎は小通詞並、吉雄六次郎は小通詞末席で、馬場佐十郎は稽古通詞であって、比較的若年の精鋭をして講習せしめようとのことかと受けとれる。

そこで長崎からは佐十郎の帰還をうながしてくるのであるが、幕府においてもこの有能な通詞馬場佐十郎の帰還に同意を与えず、左右の理由をもって江戸在住を延引せしめ、ついには文化八年五月に到って天文台に蕃書和解御用の一局を設けてその責任ある地位につけてしまった。尤大な『厚生新編』訳述事業が平日事なき時の課業として下命された意図も窺えるところである。

三 異国船応接

前述のようなわけで、江戸の天文台に詰める阿蘭陀通詞馬場佐十郎は天文・地誌・蕃書を精査取り調べるに席の温まる余裕も持てなかったのが実情のようである。

『新撰洋学年表』によれば、文化五年早速魯国文書反訳に従事せしめられており、苦心の末、訳文を成すことができたという。

「東北輳諸国図誌野作雑訳訳説」「帝爵魯西国誌」などが文化六年に成っていることで理解できよう。また文化八年(一八一二)ゴローニンの監禁されるに及び、命ぜられて松前に赴き応接に當った。と同時にこの機会を利用してゴローニンより魯語の学習を受け、その進歩著しい模様であった。⁽¹¹⁾またこの年から天文方に蕃

書和解御用が設けられて佐十郎も平日事なきときは幕府の最大の翻訳事業である『厚生新編』の訳述に従事することとなった。

一八一三(文化十)年の三月三日の日誌で商館長ドゥーフが「小通詞為八郎の息子で江戸滞在中の通詞佐十郎が日本の十月二日に松前へ出立した(中略)との通知に接した」とも記している通り、天文台の同僚足立左内とともに蝦夷・松前に出張した。ゴローニンは九月に帰帆し、馬場・足立らも江戸に帰ったが、その十二月に到り両名は魯西亜辞書取調御用掛をも命ぜられることとなった。

右の両度に互る松前出張の機会を利用して、馬場佐十郎・足立左内両名は魯語の学習が進んで、やがて、馬場佐十郎は『俄羅斯語小成』⁽¹²⁾『魯語文法規範』を成し、足立左内も『魯西亜国字反切音訳』⁽¹³⁾をものしている。

降って文政元年(一八一八)英船ブラザース号が浦賀に來航するや、また足立左内とともに浦賀に出張して応接に当り、越えて文政五年再び英船サレン号の浦賀に來るや、またまた足立左内と同所に出張して、その時は都合四度にわたって異船との間を往復し、応接の衝に當って責務を果たした。

佐十郎が出張して現地で応接の任に當ったときの具体的様子については、すでに別稿で論述した機会もあるので、詳細はそれに譲るが、要はその異国船に対する応接方法の基本型式が長崎の場合と同様であることが理解される点にある。

長崎以外の地に異国船來航の頻度のようや高く高まってきたこの期に、その語学、特に会話力が買われて、しばしば応接現地に

張を命ぜられた馬場佐十郎は、そこで異国船応接方法の基礎を布き、やがて、その経験と語学力を活かし、時代の要求に応えて応接通詞としての必携書ともいふべき会話書をも編集するに到った。その書はその必要性から順次通詞・蘭学者らの間に転写され、増補されて益々「訳司必要」の書となつていった。その写本の具体的伝存例としては、これも別稿に覆刻紹介した『⁽¹⁵⁾必用諸厄利亜語集成』や『⁽¹⁶⁾諸厄利亜語集成』などがあり、伝存会話書の例が少なく、ことに時代の推移を反映して、日本語・英語・蘭語の三ヶ国語会話書なる内容の本書は頗る注目し値するものである。

さらに、足立左内も含めて天文台勤務の馬場佐十郎の足跡をたどるとき、鎖国政策を墨守してきた江戸幕府が、北方の対ロシア問題、江戸近辺浦賀における対イギリス交渉などに直面・苦慮した時期に當つて、彼らがその諸事件の多くに命をうけて出張し、現地で応接に當つてゐることが理解できる。と同時に、それまでの幕府天文台に、加うるに蕃書和解御用の一局を新設・開局せしめた当初に當つてゐることも理解できるのであつて、これは重大な史的意義を有するかと思われる。

すなわち、従来「蕃書和解御用」の実態に関する考察・研究は極めてとぼしく、皆無といつても過言ではない。しかし、右のようなことから、この期の天文台、とりわけ蕃書和解御用の開局当初においては、幕府最大の翻譯事業ショメールの「家事百科辞典」を翻譯して実生活の利用厚生に役立つ「厚生新編」編纂に着手・推進に意を注いだ時期に當つてゐるが、これはすでによく言われるごとく、「平日事なきとき」の事業であつて、幕府におい

て差し迫つた急務は外交交渉の事務・文書の取調べにその必要があつたのである。さればこそ長崎の現地の要求をおさえて馬場佐十郎を在府・出仕せしめ、天文台員足立左内とともに外交々渉応接の任に當つて諸所に出張せしめ、その間をぬつてその任務に必要な語学書の編纂をもさせるといった必要な事情が在つたのである。天文台の主要スタッフがあげてその主力をこのことに注いでいるということは、いうなれば蕃書和解御用の一局における主要任務であつたということが言明できよう。換言すれば、この期の天文台は幕府の最高方針を帶して外交実務を所管する重要機関であつたといふことができるのである。

四 語学に関する業績 一——文法書——

阿蘭陀通詞としての馬場佐十郎が江戸に来て、有司ならびに江戸の蘭学者に与えた影響について、当時の蘭学界の泰斗にして佐十郎とともに蕃書和解御用開局と同時にあげられて勤務についた大槻玄沢が、その著『蘭訳梯航』（文化十三年）の中で馬場のことを評してゐるには、

生（馬場佐十郎を指す）ハ弱齡ヲ以テ精力他に超エ、其業益進ミ其精字ヲ募フ者多クシテ、從游ノ人日一日ヨリ盛ナリ、皆柳園ノ遺教ヲ以テコレニ授ク、是レ即今都下ノ旧法廃シテ新法正式ニ一変セルナリ⁽¹⁶⁾

と述べて、その影響の多大であつたことを特筆している。それは「都下ノ旧法廃シテ新法正式ニ一変」するだけのものがあつたからに他ならず、その新法とはいふまでもなく中野柳園の遺教を受

け、また自らの研鑽を加えて確立したオランダ語文法の修得のう
えに展開した翻訳方法にある。江戸の蘭学者の間にはそれまで確
たる文法知識のうえに翻訳を進めるという方法が未発達で、かの
『解体新書』翻訳当時の「彷彿」時代からも程遠からず、主力は
次代の大槻・宇田川らに移っていたとはいえ、佐十郎の出府当時
はまだ杉田玄白も存命中であった。したがって江戸の蘭学者の最
高峰と目される大槻玄沢をして「翁モ亦（中略）初学ト別ニ異ナ
ルコトナシ」と嘆息せしめる有様でもあったが、佐十郎の指導・
影響の著しく、かつ組織的な成果のあがった様子をみて、晩年
の玄白も「わが子弟孫子、その教へを受くることなれば、各々そ
の真法を得て、正訳も成就すべし」とその安堵の胸のうちを吐露
している。

本稿では馬場佐十郎の教授の実地を追究する紙幅の余裕がない
ので彼の著した文法書を年代順に列記・概観してその様子をみて
みたい。

1 蘭語冠履辞考 二巻 文化五年（一八〇八）秋月成。のち
安政二年（一八五五）に山路揚園が上梓。内閣文庫、静嘉堂
文庫、早稲田大学図書館などに所蔵。

2 蘭語首尾按詞考 一冊 文化五年秋八月成。写本。

従来、この書は学界に紹介されることがなかった。東北大学
図書館（狩野文庫）に一本を蔵している。

3 和蘭辞類訳名鈔 一冊 文化七年（一八一〇）訳。写本。
マリー、ハルマの品詞分類。故板沢武雄博士旧蔵、天理図
書館現蔵。

阿蘭陀通詞馬場佐十郎の天文台勤務とその業績（片桐）

4 西文規範 一冊 文化八年（一八一）訳。原書は Kor-
nells van der Palm : *Nederduitse Spraakkunst voor
de jeugd*, 1774. 初版は一七六九年ロッテルダムで出版さ
れ、二十版くらい重版の模様。

松村明教授および京都市立西京商業高等学校図書館所蔵。

5 訂正蘭語九品集 一冊 文化十一年（一八一四）成。柳園
中野先生文法をもとに和蘭詞品考ができ、これを整備・発展
して蘭語九品集ができ、さらにこれを馬場佐十郎が若干訂正
したものと思われる。

日本学士院（川本幸氏・清一関係資料）。静嘉堂文庫（大槻
文庫）。東京大学図書館。

6 和蘭文範摘要 上下二冊 文化十一年（一八一四）成。志
筑忠雄が訳した「詞品考」の原典と目される *Willems Sewel*
(1694~1720) : *Nederduitse Spraakkunst*, Amsterdam,
1708. の大要を訳したもので、詞品考、九品集より詳しく。

羽間文庫。京都市立西京商業高等学校図書館所蔵。

7 俄羅斯語小成 十一巻 文化十一年（一八一四）、市立函
館図書館。

8 魯語文法規範 六冊（巻五欠、現存五冊）文化十一年（一
八一四）。

巻一に文法規範附言があり「ゴロニン一八一三松前に於て
誌す」とあって、前年の文化十年（一八一三）十二月に馬場
佐十郎が足立左内とともに魯西亜辞書取調御用掛を命ぜられ
た研鑽の成果である。中には俄羅斯語学小成ともみえ、馬場

貞由訳述足立信願参考、上原有次校閲と明記している。内容は文学関係で殊に詩の翻訳を含んでいる。静嘉堂文庫（大槻文庫）所蔵。

9 蘭学梯航 六卷 文化十三年。

ハルマ・マリーンを参考になした文法書。六卷からなる大編なれど現在は大正四年当時存した平戸嵐山家本から抄録した一冊本が京都大学言語学研究室に伝存している。⁽²⁰⁾

五 語学に関する業績 二——会話書・単語集——

馬場佐十郎が、志筑忠雄や商館長ドゥーフに学び、プロムホフらと交わり、また自らの本格的文法研究の基礎のうえに江戸の蘭学者をして、組織的に指導をしたので江戸の蘭学界は一変したと評された。しかし先にも記したごとく、江戸幕府がその当面せる緊急要務すなわち異国船応接交渉事務に対処するに若冠⁽²¹⁾二十二歳の稽古通詞馬場佐十郎を抜擢した最大要因は翻訳力とともに彼が会話力に秀でていた一事にある。松前・浦賀と度重なる現地での応接経験を生かして、佐十郎はその実務に役立つ会話書を編纂し、それら実地の衝に役立つ、実用語を集めて単語集を編纂している。

佐十郎の編集になる会話書あるいは単語集はその実用性がかわれて通詞や蘭学者の間に広く転写・流布した模様である。

そこで、次に佐十郎の編纂になる会話書ならびに単語集を列举・紹介してみたいと思う。

△会話書▽

1 訳司 諸厄利亜語集成 一冊 墨付二十四丁

2 諸厄里亜語集成 完 一冊 墨付二十丁
忽兒朗士語

右は共に写本であって、1は日本学士院の所蔵にかかる蘭学者

川本幸民・精一資料に含まれている仮綴小写本で、その大尾に

此書ハ伊東玄朴氏ニ借受ス元ト天門台ニテ馬場子輩ノ纂集校

成スルモノ也ト云フ

天保十年戊端午前模写 養英軒主人識

とある。2は、京都大学附属図書館の所蔵にかかり、表紙に「洞観堂秘笈」との記載があるのみで、何人の筆になる写本か、他に手掛りはない。洞観堂なるものも、何人の塾名かあるいは書齋号か知り得ない。

右の両書を比較・検討して、同一系統の写本であることを別稿ですでに論証し、特に1を覆刻して博雅の供覧に附して、その利用を待ったので、本稿ではその結論だけを紹介して詳細は省略にしたがいたい。⁽²²⁾

二種の写本史料から判断されることは、

一、異国船応接の現地に臨んで、通訳官にまず要求される基本的会話の例であること。

二、その会話例は、馬場佐十郎が何回か応接した方法の実地に即応した内容と順序であることから、馬場の纂集校成になるものと記す奥書の記載は内容的に適正であること。

三、両写本に附いている申論書例は異国船を帰国せしめるに際し、申し渡した論書の例であって、内容からして、文政元年来航の英船ブラザース号に与えたもの、同五年来航の

英船サラセン号に手交した論書の実例であつて佐十郎の起草にかかり、文政七年の常陸国大津浜に上陸した英国捕鯨船に与えた論書は足立左内・吉雄忠次郎らが作つた文例を附加写本したものと判断される。

四、「必用諸厄利亜語集成」だけに集録されている問答語句や必要単語などの中には異国船から要求される欠乏品名などが多いところから、やはり異国船薪水給与令發布以降、応接掛の実務に役立つ語句・単語が追加収録されたものと判断される。

五、「必用諸厄利亜語集成」の奥書に記すごとく、天文台詰の馬場佐十郎が彼に課された重要職務の一つである異国船応接実務の中からきわめて実用的な応接会話例を纂集したのであるが、各地に異国船の出没頻度が増し、応接用員の多数要求される状況の中で、幕府に出仕する蘭学者もこの種の事務に徴用されるところがあつた模様である。このことは馬場佐十郎なき後の天文台、あるいは年代はやや降つて蕃書調所の教授連が阿蘭陀風説書の翻訳をはじめ、外交事務を兼担させられていることから容易に理解される。このような必要時であつたなればこそ幕医伊東玄朴が写本し、蟄居の身ではあつても、その実力が注目されていた蘭学者川本幸民にも筆写せしめて、しかるべき時のために用意すべき必要があつたわけである。したがつて「諸厄利亜語集成」の筆写人物も当然、右に述べた必要視された範囲内の蘭学者の一人であつたはずである。

阿蘭陀通詞馬場佐十郎の天文台勤務とその業績（片桐）

3 魯語 全 一冊 静嘉堂文庫（大槻文庫）所蔵。

これは次の単語集の項で解説する。要は本書の後半に若干の「成語」が附載されており、ロシア語の熟語と短文会話例が盛り込まれていることである。項目だけ掲げておく。

第一參着肅客、第二問答、第三天氣、第四時刻、第五諸事、第六、第七尋問、第八睡眠、第九旅行、第十朝飲、第十一買売。
 八単語集

1 魯語 全 一冊 静嘉堂文庫（大槻文庫）所蔵。

馬場佐十郎が文化八年前松前出張の折に、ゴロニン一行より伝習した成果の一つである。次の各部門のロシア語の単語が集録されている。

天文 地理 時令 宮室 家具 閨房之品 庖厨之品 食料
 食用器品 飲料 服飾 武器 武官及武備雜名 馬類及馬具
 獸類 魚類 虫類 鳥類 人体 性情 疾病 親族 人品 文
 書 金銀及度量 国名 属名辭 数辭 属用辭 冠辭 接語
 辭、代名辭 動辭。

2 *Hollandsch en Japansch Woordenboek*. 西語訳撰 一冊
 二二四頁 森田千庵自筆写本。新潟大学医学部図書館所蔵。

右の筆写人森田千庵は越後加茂出身の蘭方医で京都の蘭学者藤林普山、江戸の蘭学者宇田川榛斎に学び、シーボルトにも短時日師事した人物である。⁽²³⁾表題の下欄には特に“*Verzaalen door Ba : zazuro*”と明記し、裏表紙には“*M : Sennar*”と森田千庵が署名して、千庵愛用の印四顆も捺している。“*Verraalen door*

Ba : zazuro”とは「馬場佐十郎による翻訳」という意味であつて、本稿の正に主人公である。内容の仕組はイロハ分にしてあり、さらにその各項目内が更に天文、地理・時令、数量、宮室、人品、家倫、身体、器物、衣服、飲食、錢穀、采邑、人事、動物、植物など十六門に分類されているのである。

ところで、ここまで点検すると、右の「西語訳撰」に非常に似た語学書を思い出す。それは次の辞書である。

Nieuw verzameld Japans en Hollandsch Woordenboek
door den vorst van het Landschap Nakats Minamoto
Masataka. 1 deel. gedrukt bij zijn dienaar Kamiya Filo-
josi, 1810.

これを訳せば、

中津藩主源昌高による新編日蘭辞書 一編 家臣神谷弘孝による出版 一八一〇年

となる。これは、榮亭の文化庚午仲秋年（七年一八一〇）の凡例から『蘭語訳撰』の書名をもって弘通し、馬場貞由（佐十郎）が蘭文の序文『Voorrede』を寄せていること全て周知の通りである。

この『蘭語訳撰』の内容の仕組もイロハ分にして、さらにその各項目内を天門、地理、時令、数量、宮室、人品、家倫、官職、身体、神仙、器用、衣服、飲食、文書、錢穀、采邑、人事、動物、植物の十九門に分っている。

『西語訳撰』『蘭語訳撰』ともによく似た仕組であることに気付く。

そこで試みに一例として、伊項の天文部を掲げてみれば下段の

表の通りである。（但し、納日^{イリヒ}などの日本語とそのルビはタテ書であるが印刷の都合上横書にした。）

これを見て同じでないという人があるであらうか。同一内容であることが明白に証明されるわけである。

右の事実は、馬場が中津侯の『蘭語訳撰』に寄せた蘭語序文に「それまで私が暗記していた所のオランダ語を挙げて悉く侯の家臣神谷弘孝に書き写させたのであ

る」という一節に符合するのであつて、しかも、いま、「暗記していた所」を口述伝授したのでなく、すでに馬場が記憶して纏めておいた『西語訳撰』なる日蘭語彙集があつて、その筆記を許したことが理解できるのである。

さらに、馬場は蘭語序文中で「その後、侯自身も多くのオランダ語を蒐集された」と述べているが、それが各項目中の各門が『西語訳撰』の十六門から『蘭語訳撰』の十九門に三門増加していることにも関連することかと考えられるが、両者の各項目・各門の全般に互る比較検討は別稿にゆずる。要は、有名な『蘭語訳撰』の内容の大部分が、すでに馬場

馬 場 : 西 語 訳 撰	昌 高 : 蘭 語 訳 撰
ondergaande zon	Ondergaande zom
donder	Donder
blexem	Blexem
noord west	Noord West

の訳述輯録しておいた『西語訳撰』の内容そのものであることが証明されたことで十分である。したがって馬場の『西語訳撰』の蘭文表題に *Verlaeten door Ba : zazuro* と明記してあるに比して、『蘭語訳撰』の蘭文表題には単に *door* とあるにすぎず、凡例にも「毎類皆共ニ先覚師友ニ請フテ其東西諸言彼是全ク切当スルモノヲ撰ヒ取テ」とある文言の背景が判読されるところである。

六 世界地理・歴史に関する業績

馬場佐十郎は長崎の地に生を享け、阿蘭陀通詞となり、公儀の抜擢を受けて江戸に上り、蝦夷地ならびに浦賀表へ異国船応接にたびたび出張した。

いずれの地においても佐十郎に課せられた第一の任務は異国船・異国人との応接にあり、それが関係の取り調べにあつた。このことはこの事務が当時幕府の対外政策の急務の内にあることであつたと同時に、佐十郎をして否応なく鎖国日本の枠を越えて、世界に眼を向けさせることにもなった。ここから佐十郎の世界地理・歴史に関する意識が展開し、業績が結実する。

右の成果は、直接下命に應えてなしたものととしては、文化六年（一八〇九）の秋になる『東北韃靼諸国図誌野作雜記訳説』六巻六冊があり、また翌七年（一八一〇）仲冬になった『帝爵魯西亜国誌』なる翻訳がある。前者の原書は *Nicolas Wizen の Beschrijving van Oost en Noord Tartarije 1785*（*べしきいん*）韃靼の北の諸国ならびに野作島を詳記しているところの訳であつて

「己巳ノ孟夏 崎鎮士屋君」の勸奨によって訳述呈上したものである。後者は *Jakob Broedeler*（佐十郎は *Jakob* を *Iohannes* と誤っている）の著になつた *Historie van Keizerrijk Russland*（正式書名は非常に長い）の交易篇を抄訳したものである。さらに内命を受けて翻訳に当つたものとしてゴローニンの『日本幽囚記』を挙げねばならない。これは文政四年（一八二一）に翻訳に着手し、進捗したが、翌文政五年夏、業の終るを見ず死去するに及び、後は天文台の杉田立卿・青地林宗が訳業を継承して、同年（一八二五）十月、本編十二巻に附録二巻をつけて訳了した。これが世に周知の『遭厄日本紀事』であつて贅言を要しないところであらう。

ここでは、佐十郎に関する次の二点を紹介しておきたい。

それは第一に、幕府天文台の蕃書和解御用に仕える佐十郎が江戸幕府のオランダ商館長一行に江戸の蘭学者が面談に赴いた際、通弁役を勤めて貢献したことである。

それまで江戸参府の蘭人一行への対談は、官医桂川甫周や天文方高橋作左衛門を通じて事前に在府の長崎奉行に希望の旨を申し出て許可を得、対談当日は宿所長崎屋原右衛門方で附添通詞の立合・通弁を介して行われるのであつた。²⁴⁾しかし、これは手続の煩雑さ、附添通詞の用務多忙なるため、対談に赴いた江戸の蘭学者にとつては十分の時間を得て利益を受ける余裕もなかった模様であつた。事実「長崎奉行に掛合ニ而時日を問合罷越候段、彼方ニも差支多く、稍々一度罷越、通詞其外立合等迷惑ニも可有御座候と暫時ニ引取候得共、対談と申名而已ニ多く承度儀を委敷不承事

法政史学 第二十一号

も御座候⁽²⁵⁾」という状態であった。

文化庚午年(一八一〇)はオランダ商館長の江戸参府の年に当
っており、ヘンドリック・ドーフが随員として簿記役ジェルク・
ホゼマン Dirk Goseman と上外科医ヤン・フレデリック・フェ
イルケ Jan Frederik Feilke を従え、大通詞中山作三郎が附添
って、一行は四月二日に江戸に着いた。この度も例によって対談
が行なわれたが、特にこの年のことは大槻玄沢の『西賈対晤』に
詳細なる記録が載っている。その文化七年「庚 西賈対話記三月
十七日の条に」^{〔稽古通詞此節通弁 稽古通詞此節通弁〕}通弁 馬場佐十郎」とみえていて、
新たに馬場佐十郎が対談の通弁を勤めることとなったことがわか
る。これは注目すべきことである。それまでの参府附添通詞は長
崎の阿蘭陀通詞仲間のうち年々大通詞一人、小通詞一人が交替で
その任を務めたのであって、稽古通詞はその任を命ぜられていな
い。それが佐十郎において任命されたということに大なる意義が
ある。さらに、この文化七年は、佐十郎が天文台入りをしてから
初めての参府の年に当っていることである。これを考え合せてみ
るに、ここでも佐十郎の語学力特に会話力が買われたことのよき
証左以外の何ものでもない。また、この年の対談の模様をみる
に、医学上の問答がみられることは恒例のことであるが、この外
に、オランダの主要都市の社会状態、特に学校教育・病院施設に
関する質問がみえており、さらに

一 イギリス船軍将ノ名

glid wood pellen 齡廿九式十歳位ニ見ユ 性質温和ナル者
ナリシト父ハ本国ニテ軍總大將ナリト⁽²⁶⁾

八四

などともみえ、支那交易のことや、Orange huys を説明するに、
「培養スルムロ」の如きものであって「魯西亜等殊ニコノ設ケア
リ」などともみえて、話題の広く、時事を反映した内容であるこ
とを知ることができる。いうところのイギリス船軍将ノ名 Glid
wood pellen はかの文化五年(一八〇八)夏長崎港を侵寇した英
艦フエートン号 H. M. S. Phaeton のキャプテン・ペリユー
Fleetwood B. R. Pellew に他ならないところである。フエート
ン号事件惹起当時ならびに事後処理に苦慮・活躍した商館長ドウ
ーフから、始めて直接に聞く話であったわけであり、佐十郎にと
っては語学学習上の恩師でもあって面談・通弁も一入のことであ
ったと想像にかたくなく、大槻玄沢が手記した

同 夜

一加比丹部屋ニ於テ三人酒宴ノ処ヘ至リテ寛語ス 左十通弁

ホウセマン ヘルケ同坐献酬ス⁽²⁷⁾

などの一節を眼にするとき、その夜の対談の状況が如実に浮かび
上ってくる。

さて、第二に紹介すべき点は、佐十郎が江戸の天文台の番書和解御用の局において海外情報調査・翻訳に当たっていたという事
実である。

蘭学者小関三英は文政九年(一八二六)四月の交に、参府の商
館長スチュレル Joao Willem de Sturler と対話してその模
様を記録している。因にこの時の参府一行には外科医としてシー
ボルト Dr. Philipp Franz von Siebold、薬剤師・筆者として
ビュルヘル Heinrich Bürger が従い、大通詞末永甚左衛門・小

通詞岩瀬弥十郎が附添っていた。

右の対話筆記の中で馬場佐十郎が魯使ゴロニンから聞いたナポレオンの話や、フランス革命に関する知識も紹介しており、

佐十郎が話ニハホナハルテ自分十六世王を殺して自立してロー

テウエイキ第十七世王と自称せしよし、此風説書誤ならん⁽²⁸⁾

との引用・註記を行っているところをみると、佐十郎が明らかに天文台において阿蘭陀風説書を閲読・検討し、異国船応接の際にはその公的使命と自らの関心興味から世界情勢の把握に努めている様子を理解することができるのであって、すこぶる注目すべき一事かと思われる。これは、この期の天文台が、本来の編暦事業に加えて、外交上の必要から、その台内に「地誌御用」ならびに「蕃書和解御用」の部局を設けて時宜の必要に対処したことの反映であるとともに、この種の業務に向く人材の払底した時に佐十郎の活躍に待つことのいかに大なるものがあったかのよき証左と判断すべきものといえる。

七 自然科学に関する業績

佐十郎は天文台に籍を置いて、異国船応接、外交文書の翻訳・調査、海外事情の調査に寧日なき状態であったが、『新編洋学年表』はじめ諸書に記す通り、「平日事無き時は百科全書の反訳」という大事業をも課せられていた。

右の翻訳は板沢博士も評されるごとく、江戸幕府最大の翻訳事業となったもので、現に葵文庫に『厚生新編』の清書稿本が残っている⁽²⁹⁾。

阿蘭陀通詞馬場佐十郎の天文台勤務とその業績（片桐）

もつとも、右の翻訳には馬場佐十郎の多忙を救うべく、蘭学者大槻玄沢をして

御役宅へ相詰馬場佐十郎手伝可仕候⁽³⁰⁾と達せられている。

佐十郎の翻訳は鋭意その没年まで続けられた。

さらに、この期の諸般の要請から、この他にも種々の科学的分野の翻訳を行っているであって、次にそれを概略列挙紹介してみる。

1 琉璃宝鑑 二巻二冊 文化七年（一八一〇）成。原書はボイス Boijs, Ebert の著書で、ガラスの製法に関する部分の抄訳である。静嘉堂文庫所蔵。

2 天気計儀訳説（一名「機尔模墨的尔」ともまた「占気簡訳説」とも表題されている）文化七年（一八一〇）訳。一冊。バロメーター晴雨計の翻訳である。これはボイスの韻府第二巻めに当る部分と、シヨメールの第七巻に当る部分の二種の抄訳である。それぞれ図および図説よりなる。静嘉堂文庫、日本学士院所蔵。

3 厚生新編 共訳。文化八年（一八一二）三月より起業、この年に第一冊がなり、以降、少なくとも第二冊、第三、第四冊に参与している。原本は Noel Chamel Huishoudelijk Woordenboek をオランダの J. A. de Chalmot が増補訂正して蘭訳した一七七二年版（八冊）を底本として、庶民の利用厚生に役立つ諸項目を、諸書を参考して訳述したものである。

4 泰西彗星論訳草 文化八年（一八一二）訳 原本は英人マル

チン Benjamin Martin の一七四四年出版になる蘭訳本 *Fitzoofische Onderwijzer*. 『窮理全書』の巻之二第五章である。彗星、特にハレー彗星のことにも言及。問答体の原書に訳者の按を附し「三彗星遊輪之図」なる原図もせ、末尾に文化八当年の秋八月二十八日出現の彗星を浅草暦局で観測の模様を図解記録している。このための参考翻訳であることは明白であらう。日本学士院所蔵。

5 泰西度量考 一冊 文化九年（一八一二）秋の編輯になり、のち桂川寧（甫賢）の増補を得たものが伝えられている。長崎県立図書館所蔵。

6 新巧曆厄日多国星学原訳草 一冊 文化九年（一八一二）。新巧曆書二巻中のエジプト星学原訳草で二八三章より三〇八章に当る抄訳である。「附言」によれば、「文化九年九月 繙訳官 臣馬場貞由誌」と謹厳に記し、高橋景保の閲校を得ているから、天文台における公的翻訳であると判断される。羽間文庫所蔵。

7 泰西時規図説全（時計図説）一冊 文化十四年冬（一八一七）ケレルクの十四冊本格物窮理書にのっているところを訳したもので、図と図解を附している。東北大学狩野文庫所蔵。

8 遁化秘訣 文政三年（一八二〇）訳。のち嘉永三年（一八五〇）および安政二年（一八五五）に『魯西亜牛痘全書』の題名で刊行。原本は一八〇五年モスクワで出版された『牛痘の全般的接種により痘瘡感染を完全にまぬかれる方法』なる書の「痘瘡感染を完全にまぬかれる方法」の部分だけを訳したものであ

って、実にジェンナーが牛痘接種成功後、わが国紹介の嚆矢である。⁽³¹⁾

9 究理摘要 文政五年（一八二二）訳。（未見）

10 泰西七金訳説 七巻三冊 安政年間の木板本。金・銀・銅・鉄・錫・鉛・水銀の冶金を記述している。嘉永七年版五冊。⁽³²⁾

11 魯西亜国算学手引草 一冊 共訳。原本は一七八四（天明四）年、ペテルベルグ出版の入門書で、義訳したものという。

題簽は「算学积語」とある。巻末に附してある観斎の識語によれば、本書は文化中ゴローニンが松前に遭厄の際、足立信頭（左内）・馬場貞由（佐十郎）がこの書を成し、馬場が渡辺華山に贈り、華山がさらに観斎内田五寛に贈ったものであるとの継緯が記してある。東北大学狩野文庫所蔵。

結 言

長崎出身の阿蘭陀稽古通詞馬場佐十郎の短かい生涯をみてきた。その事蹟は彼の上司であり幕府天文方を勤めた高橋作左衛門景保の撰文になる墓碑銘を手懸りに零細な資料をもってようやく概観するところであるが、その活躍は文化五年（一八〇八）に江戸の天文台に召されてから見るべきものがある。

佐十郎がその力量を発揮して挙げ得た成果を、試みに分類して私案を示せば、すでに小論の章立にもなしたごとく、

- 1 語学に関する業績のうちでも、特にオランダ文法書の翻訳・修得から組織的教授法をもって江戸の蘭学界をはじめ、広く以後の斯界に影響をおよぼしたこと。

2 語学に関する業績のうちでも、従来兎角等閑視されてきた彼の単語集の作成、会話書の纂集などに関する努力の結晶は、彼が負った責任ある公務に奉仕する中から編み出された、いわば実用が生んだ成果であって、専ら実用の具あるいは必携書となつて、必要視される範囲の人達の間に普及して増補されていったものである。もつて彼の力量と果した影響力の大きさを知るべきものかと思われる。

3 世界地理・歴史に関する業績として、特に欧亜の社会に対する意識が随所に認められ、翻訳・通弁を通じて、天文台あるいは江戸の蘭学者達に、公私に亘つて周旋・貢献るところ多々あつて、彼の果した功業決して看過しえないものがある。

4 自然科学に関する業績として記録されるべきは、専ら該分野における彼の翻訳・紹介の功績にある。中でも『厚生新編』の公的記述をはじめ、露船応接の際、ゴローニンから贈与された種痘書から訳した『通花秘訣』はわが国における Jenner 種痘紹介の嚆矢の榮を担つておるし、彗星に関する訳業は天文台業務に密接な関係が認められる。その他、度量考、算学等、比較的基礎的科学の諸訳業も蘭学者に与えた影響が認められて頗る注目に値する。

さらに、以上の諸分野は、決して独立・無関係に成つたものではないのであつて、阿蘭陀通詞にして天文台番書和解御用に抜擢された本務の範囲を越えるものではなかつたこと。むしろ江戸幕府が直面・苦慮したこの期の異国応接・外交文書翻訳の急務を抱

えた天文台の要員として、十分耐えて活躍し得た青年スタッフの力量から派生し、結実した成果に外ならないと認められるところである。

なお史料の制約から触れ得なかつた佐十郎の訳業も若干残つており、また人間佐十郎をめぐる諸問題や公務のかたわら、オランダ語学を主とした塾を経営して、その影響下から幾多の俊秀を輩出せしめるなど興味を引く点がある。しかし許された紙幅も超過してしまつたので、これらは一切他日筆を執ることといたしたい。

註

(1) 馬場佐十郎の小伝については、

勝俣銓吉郎氏「語学の逸才馬場佐十郎」新小説 第三十一年第七号(大正十五年七月)。

呉秀三博士『シーボルト先生其生涯及功業』。

板沢武雄博士「洋学界の新進馬場兄弟」歴史教育 第六卷 第一一号(昭和三十三年十一月)。

沼田次郎氏「馬場貞由関係の資料について」蘭学資料研究会研究報告第一九八号(一九六七・七)。

らが代表的と思えるが、墓誌銘を中心に、語学面に関する研究が主であつた。

(2) 板沢博士(1)。呉博士(2)。

(3) Hendrik Doeff: Dagregister gehouden in 't Comptoir Nagasaki, Anno 1808.

(4) 大槻玄沢『西貢対晤』。

- (5) Hendrik Doeff: Dagregister gehouden in 't Comptoir Nagasaki, Anno 1813.
- (6) 大槻如電『新撰洋学年表』昭和二年一月。
- (7) 大槻如電(6)。板沢博士(1)。
- (8) 斎藤阿具博士訳『ゾーフ日本回想録』異国叢書。
- (9) 片桐一男「フェートン号事件が蘭船の長崎入港手続に及ぼしたる影響」法政史学第十九号(昭和四十二年一月)。
- (10) 大槻如電(6)。
- (11) 『日本幽囚記』岩波文庫。
- (12) 大槻如電(6)。
- (13) 片桐一男「静嘉堂文庫所蔵大槻家旧蔵蘭書考」蘭学資料研究会研究報告第七十一号(昭和三十五年十月)。
- (14) 片桐一男「幕末における異国船応接と阿蘭陀通詞馬場佐十郎」海軍史研究 第十号(昭和四十三年四月)。
- (15) 片桐(14)の附録参照。
- (16) 大槻玄沢『蘭訳梯航』下(大槻茂雄『磐水存響』乾)。
- (17) 板沢武雄博士『日蘭文化交渉史の研究』昭和三十四年二月。二二頁。
- (18) 大槻玄沢『蘭訳梯航』下。
- (19) 杉田玄白『蘭学事始』(岩波文庫)。
- (20) 杉本つとむ氏「大槻玄沢に関する二三の考察」早稲田大学図書館紀要第九号(昭和四十三年三月)。
- (21) 沼田次郎氏「馬場貞由の和蘭文の書翰について」日本歴史第二四一号(昭和四十三年六月)。
- (22) 片桐(14)。
- (23) 片桐一男「蘭医森田千庵伝研究」法政史学 第十四号(昭和三十六年十月)。
- (24) 大槻玄沢『西貢対晤』。
- (25) 拂菻新聞。
- (26) 大槻玄沢(4)。
- (27) 大槻玄沢(4)。
- (28) 小関三英「拂菻新聞」。
- (29) 板沢武雄博士『日蘭文化交渉史の研究』二七五頁。
- (30) 大槻如電(6)。
- (31) 村山七郎氏「日本最初の牛痘法文献の原書」。「通花秘訣原書の和訳」順天堂医学第十一卷第二、四号、第十二卷第一号(昭和四十年、四十一年)。
- (32) 三枝博音博士編解説『日本科学古典全書』第十三卷、昭和二十一年六月。
一九六八・一二・九稿 一九六九・二・一八加筆